

しずおか発

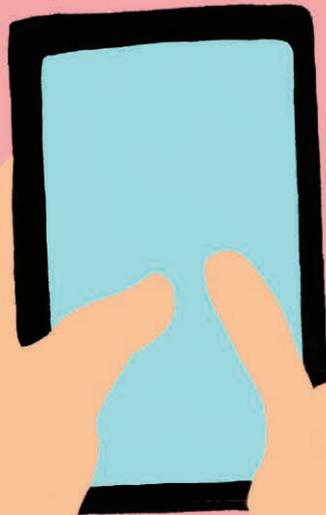
男女共同参画の今を知る情報誌

ねっとわあく

2023/3/14 Vol.79

拡散「希望」

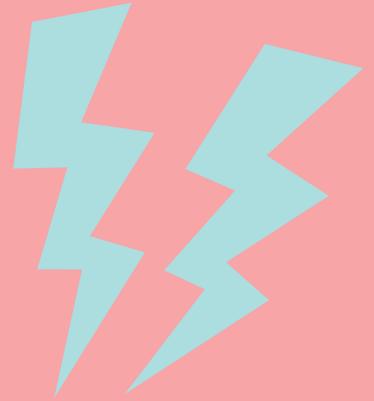
～一緒につくる未来～



目次

- ② ローカルカルチャーを未来へ繋ぐ
- ⑤ 無意識の思い込みに気づいていますか
～ジェンダー意識のアップデートをしよう～
- ⑨ 有事に活かす 「平時のネットワーク」
- ⑪ 歳を取ってもこの街で、住み慣れた家で暮りたい
家族以外に頼れる人、あなたにはいますか？
- ⑬ 「ねっとわあく」 アーカイブ 12号より

#拡散「希望」 ～一緒につくる未来～



「受援力(じゅえんりょく)」という言葉を知っていましたか？
困ったときに「助けて」と言える力のことです。

東日本大震災をきっかけに広まったこの言葉の大切さを、2022年9月、静岡県に大きな被害をもたらした台風15号によって実感しました。

家屋の浸水や断水、土砂崩れによる道路の通行止めなど、困難な状況でも住民たちは互いに助け合い、また多くのボランティアが集まり、支援の輪が広がりました。

「助けて」と声をあげることの大切さ、この最初の「助けて」が発信できれば状況は動き出します。

災害時だけでなく、日頃から困ったときに「助けて」と言える社会であること。それに応えて手を差し伸べること、援助や支援を遠慮なく受け入れることも大切です。

「助けて」だけでなく「ここが変だよ」「一緒に何かをしようよ」と声をあげることで、誰かと繋がり一緒になって社会を、世界を少しずつでも変えていけると思います。

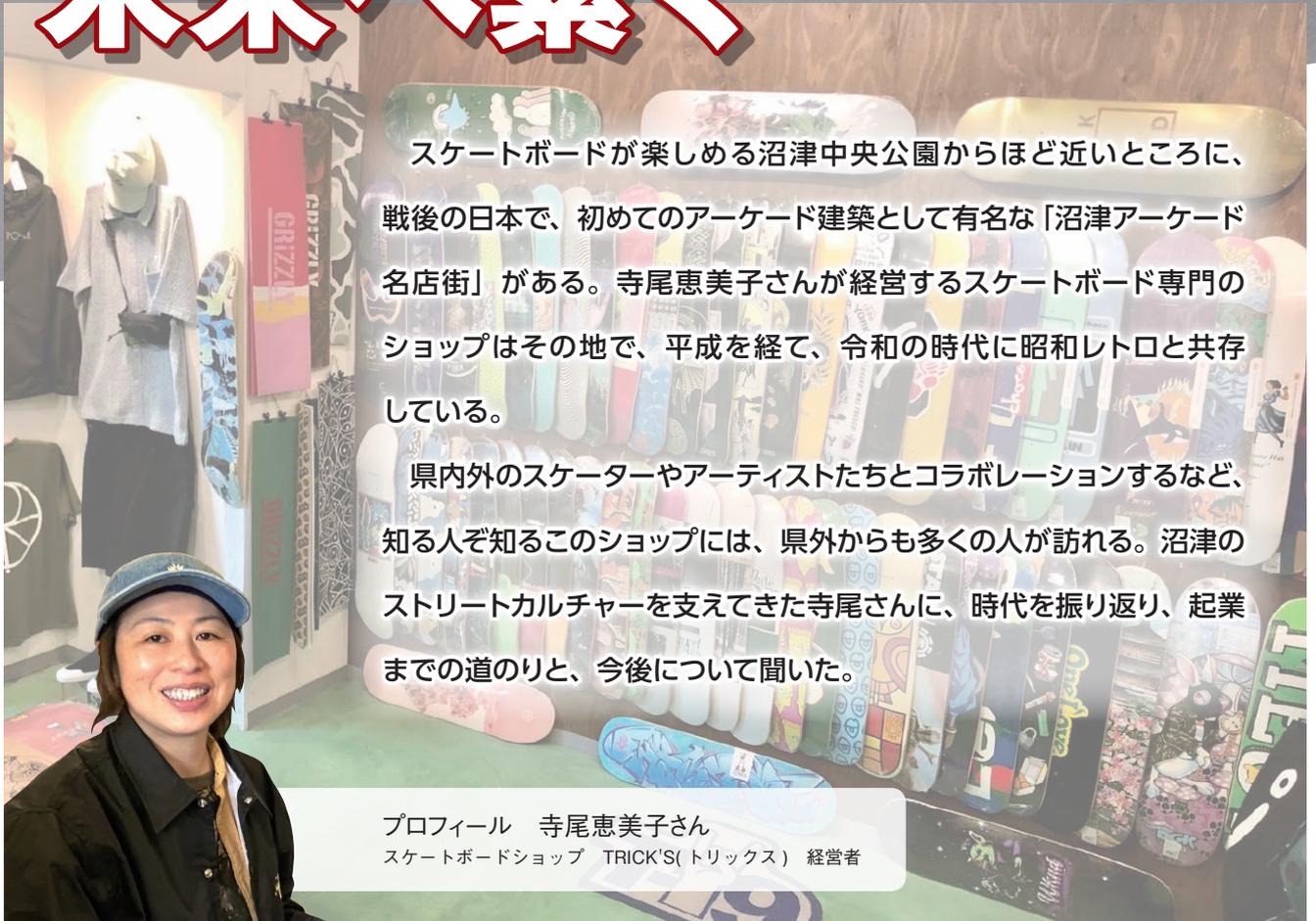
今号は、ぜひ「受援力」そして、人との繋がりを意識しながら読んでください。

テーマは #拡散「希望」～一緒につくる未来～

「希望」の種は一人ひとりの中にあります。拡散することで人と人が繋がって未来が創られます。これからの男女共同参画社会を一緒に創って行きませんか？

各記事には、いろいろな形で「受援力」「支援」「繋がり」「未来」のキーワードが出てきます。編集員がそこに込めた思いを感じ取っていただければ幸いです。

ローカルカルチャーを 未来へ繋ぐ



スケートボードが楽しめる沼津中央公園からほど近いところに、戦後の日本で、初めてのアーケード建築として有名な「沼津アーケード名店街」がある。寺尾恵美子さんが経営するスケートボード専門のショップはその地で、平成を経て、令和の時代に昭和レトロと共存している。

県内外のスケーターやアーティストたちとコラボレーションするなど、知る人ぞ知るこのショップには、県外からも多くの人々が訪れる。沼津のストリートカルチャーを支えてきた寺尾さんに、時代を振り返り、起業までの道のりと、今後について聞いた。

プロフィール 寺尾恵美子さん
スケートボードショップ TRICK'S(トリックス) 経営者

継続してきたこと

1990年代は、スケートボードやスノーボード、サーフィンやダイブボードなど多様な横乗り系のボードスポーツが流行した時代だ。その頃、10〜20代だった寺尾さんは、いくつものボードスポーツを夢中になって楽しんでいった。「始めたころは、教えてくれる人はいなかった。見よう見まねの自己流でした」と語る。

その時、抛り所となっていたのは、自身が通っていたボード用品を扱うサーフショップ「アウトライン」だった。当時、別のショップで働いていた寺尾さんは、「一緒に働いてみない？」とスカウトされ転職を決めた。沼津駅南の百貨店に入っていた、スケートボードをメインにスノーボードも取り扱う「トリックス」という支店で、正社員として採用された。そして、日頃の仕事ぶりが認められ、店長を任されるようになった。

その後、沼津駅周辺は集客数の減少により、百貨店などが撤退するようになる。2008年、「トリックス」も百貨店から撤退し、一時「アウトライン」本店の一角に間借りをし、営業を続けていた。その間社長とともに、路面店として営業できる物件探しをしていた。社長の訃報を聞くことになったのは、その矢先のことだった。

当時社長はまだ50代後半で、現役のサーファーだった。その日、大好きな海でのカイトサーフィン中に、帰らぬ人となってしまった。寺尾さんは経営を維持しながら、自身の今後を模索した。3年が経ったころ、本店を移転して規模を縮小することになり、ここで人生の岐路に立たされることになった。

寺尾さんは、「十数年も通ってくれている常連さんやスケーターたち、メーカーさんとの繋がりが終わるのも寂しかった。社長夫妻とは身内のように親しくしていたこともあって、『路面に店舗を構える』という、社長との目標を達成しなかった」と、その当手を振り返った。その思いがあつて寺尾さんは「自分が『トリックス』の名を引き継いで残したい」と、従業員として雇われていた立場から、独立する決意をした。

起業を決意する

起業について何もわからなかった寺尾さんは、「アウトライン」を退職後、まずは起業に詳しい友人に相談した。そして、沼津の地域経営支援をするNPO法人や、商工会議所で支援を受けながら、今後の計画を立てた。数か月の間、夜勤の仕事をして、起業に向けて資金を貯えた。

ちょうどその頃、東日本大震災が起り、不安な気持ちになりながらも、県の融資や沼津市の補助金を活用するための事業計画書など、慣れない書類作成を行った。アーケード名店街の空き店舗と契約し、開店準備も整えた。いろいろなことを同時進行しながら、友人や多くの支援者の協力によって、退職から数か月で開店に漕ぎ着けた。



アーケード名店街 北側入り口

あれからもうすぐ12年。「少しでもローカルスケーターのサポートが出来たら、と思っていました。アーティストとの繋がりも、いろいろな人たちに、知ってもらえる場をつくりたかったんです。接客業を十数年続けてきた経験を経て、起業に挑戦し、まさかこんなに続くとは思いませんでした。振り返れば、あつという間でした。でもやっぱり、一緒にスケート文化を盛り上げてくれる、所属ライダー（トリックスがサポートするスケーター）たちの協力がなければ、継続できなかったと思います」と語る寺尾さん。

沼津のローカルカルチャー（地域の生活の中で育まれる文化）としてスケートボードが根付いた背景には、スケーターを支えてきた寺尾さんの存在があった。流行が定着し文化になるまでには、そこに関わり続ける人たちが必要だ。寺尾さんは、今後所属ライダーやローカルスケーターたちと協力して、沼津のスケート文化を盛り上げていきたいと考えている。

身近になったスケートボードのローカルルール作り

1990年代に流行した、スケートボードでストリートを滑走するスケーター。ヒップホップミュージックとストリートファッションとともに、若者のカルチャーとしても定着していった。

2019年からの新型コロナウイルス感染症拡大は寺尾さんの店にも影響を与え

た。「スポーツ施設が閉鎖され、いろいろなスポーツが出来なくなりました。でも、スケートはどこでも出来るので、逆に多くの方が来店してくれました」と寺尾さん。

そして、2021年、東京オリンピックでは、正式種目として採用されたスケートボードが注目を集めた。さらに、日本人がメダリストとなったことで認知度も上がり、スケーター人口が増えた。現在も日本各地でスケートパークが続々と作られている。

しかし、新しいものを取り入れるときには、新たなルールが必要になる。

寺尾さんは、「若い頃、ボードスポーツを楽しんでいた世代が親になったこともあり、周囲の大人の理解が広がっている。子どもたちは、幼い頃からスケートボードに接する機会が増え、より身近になっている」と、時代の変化を感じている。

一方で、スケートボードに対して「危険・うるさい・怖い」といったイメージから、迷惑行為を連想する人も少なくない。ストリートをホームにするスケーターと、地域住民との間に、「共存するためのローカルルール」が定着していないことが要因の一つだ。多くの地域では、スケートボードを禁止し、その場所からスケーターを締め出す。それは、今ある状態を維持するために、異文化である新参者を拒み、自分たちの地域から他の場所へ追いやることになる。こういった問題を回避する行動は、排除しているだけで、何の解決にも至っていないと言える。

arcomichi (アルコミチ)

2018年11月2日(金)から4日間「沼津アーケード名店街」で「arcomichi (アルコミチ)」が開催された。沼津市が道路を歩行空間にする社会実験は、多くの人たちが道の使い方を考える機会となった。通行止めにした車道には、芝生やハンモックのあるくつろぎスペースや、奇想天外なチャレンジショップも出現。寺尾さんが提案した、「スケートボードパーク」にするという試みも実施された。

沼津市公式 HP (<https://www.city.numazu.shizuoka.jp>) 参照



車道に設置されたセクション（障害物）を楽しむキッズスケーターたち

沼津中央公園では、地元のスケーターたちが、スケートをする時間帯を決め、スケートを楽しむためのセクション（障害物）の片づけを徹底することなど、沼津市と地域住民との間で決めたルールやマナーを守りながら楽しんでいた。しかし、新型コロナウイルス感染症拡大やオリンピックの影響で、市外から訪れるスケーターや初心者など、ルールやマナーを知らないスケーターが急速に増えた。これにより、残念ながら周辺住民からの苦情も増えたそう。寺尾さんは「改善するために、トリックスの所属ライダーや、ローカルスケーターがルールやマナーを教えて『守っていきましょう！』と話し合っていますし、私も頻繁にお店で声をかけています」と語ってくれた。

寺尾さんは、子どもたちが通いやすい沼津駅の近くに、公共のパークが必要だと考えている。それを実現させようと署名を集め、沼津市に何度も交渉に行っている。さらには、慣れないながらも、正装した静岡県東部のスケーターたちと、「東部地区にスケートパークを作ってほしい」と静岡県へ陳情に行くなど、行動を起こしている。

民家がなく、集客が減少した駅の周辺に、仕事や学校帰りに楽しみながら技を磨ける、スケーターたちの居場所を作りたい。そのためにも、寺尾さんは地域の理解を得ながら、住民とスケーターそれぞれが歩み寄り、共存できるローカルルールへの見直しを提案していく。

アーティストたちの繋がり

多くのプロスポーツ選手と同じように、日本では、プロスケーターになっても、それだけでは生活できない人がほとんど。ショップ経営や、自身のブランドを立ち上げるなど、いろいろな仕事に就きながら、スケートボードをしているという。「音楽活動をしたり絵を描いたり、アーティストとして活動している人も多く、『トリックス』では、そのようなスケーターや、繋がりのあるアーティストの個展、展示販売も不定期に開催しています」と寺尾さん。ギャ



函南出身のスケーターでアーティスト「HIROTTON アートショー」の様子

ラリースペースを提供するなど、独自のネットワークを使い、国内外の様々なアーティストとコラボレーションしている。

「多くの仲間を支えられて続いている」という寺尾さんは「小売業は儲からないですよ」と正直だ。「個人経営は自分次第だから、甘えがあると長く続けられない、と不安になることもある。だけど、自分のスタイルやペースでできる仕事だ」と寺尾さん。自分で決められる自由と、責任があることを教えてくれた。女性の起業について聞くと、「これだ！というやりたい気持ちがあつて、行動を起こせば、意外とできるものですよ。私がそうでしたので。パートナーや家庭のある方も、自分なりのやり方でチャレンジしてもいいと思います」という。「経済的にも精神的にも多くの支援を有効に活用して、自分のやりたいことを諦めずに挑戦してほしい」と、起業仲間が増えることを楽しみにしている。

寺尾さんは、新型コロナウイルス感染症拡大の影響で自粛していた個展や、スケートボードのコンテストなどを再開しようと考えている。そうすることで年齢も性別も関係なく、スケーター同士が互いに刺激し合いながら、モチベーションや技術を高め合うことができるからだ。そして、インターネットを活用し、世界中の人々と繋がりをもちながら、「ホームタウンである沼津のストリートカルチャーを未来へ繋げていきたい」と、これからも寺尾さんは仲間とともに行動していく。



「POLAR SKATE CO. ジャパンツアー」で来日したプロスケーターとローカルスケーターたちが交流を深めた

あとかぎ

人は、社会生活を営む上で、さまざまなターニングポイントに立ちます。そのとき、経済的な理由や家庭の事情で、仕方がないと諦め、行動できなかった経験がある人は少なくないと思います。人生で後悔しないために、周りの支援を受けながら、失敗を恐れず、自分の可能性を信じてチャレンジしてほしい、と感じました。

そして、地域で主体的に活動するためには、家庭でも活動の場でも今の時代に則したルールづくりが大切で、老若男女の誰もが、差別・排除されることのない社会が必要。寺尾さんの活動から、未来の展望を多くの人たちと共有し行動することで、共存共生できる社会の実現に近づけると知りました。私たちも行動する勇氣を持ち続け、よりよい社会にするため、多くの人たちと力を合わせ、共に行動していきましょう。

(望月富美代)